

## [書 評]

Bennett, Alan (2007). *Four Stories*.  
London: Profile Books LTD

岡 野 浩 史

現代イギリス演劇を代表する戯曲家 Alan Bennett (1934-) は1960年代に *Forty Years On* で成功を取めて以来、多方面で活躍してきた。演劇の脚本を書いて、自らも舞台に立つだけでなく、ラジオ・テレビの世界でも多くの作品を手がけている。とりわけ BBC テレビで1988年、そして10年をおいて1998年に放送されたモノローグのシリーズ *Talking Heads* は放送直後から高い評価を受け、今日ではほとんど古典的地位を確立している。現在では A レベルの試験（大学入学資格検定試験）にも登場する1988年のシリーズにより、ベネットの英国での名声は確固たるものとなった。

*Talking Heads* にはアルツハイマー病の症状の出始めた母親と暮らす独り者の中年の男——これはベネット自身によって演じられた——から、売れない女優、デパートの店員をしている未亡人、牧師の妻など様々な市井の人々が登場し、様々な出来事を語る。語られるのは日常の平凡な出来事から映画の撮影現場、殺人事件まで多岐に渡る。語りの進展とともに語り手の人生と人間とが、そして現代の人々が置かれた状況があざやかに浮かび上がり、忘れがたい印象を残す。特に、ささいなディテールからかもし出される味わい深いおかしみはベネットの独壇場であり、多くのイギリス人がベネットを支持する理由の一端はここにある。

1994年に出された *Writing Home* は、ベネットのそれまでの書評や自作への序文、そして日記などを中心に編まれ、自伝的なエッセイも含まれた、比較的地味なものだったがベストセラーとなり、ベネットの国民的作家としての地位を強く印象付けた。そしてパブリックスクールを舞台にした戯曲 *The History Boys* (2004) はイギリスで最高の演劇賞に輝いただけでなく、アメリカのブロードウェイでも上演されて多くの賞を獲得し、さらに映画化されるまでに至り、*The Spectator* の書評子は、ベネットは *The History Boys* により「イギリスの至宝から国際的スーパースターとなった」と評した（2007年9月1日号）。今、

アラン・ベネットは名声の絶頂にあると言っていいだろう。

*Four Stories* (Profile Books, 2007) は戯曲家ベネットの初めての小説集である。とは言っても四つの作品からなる集中の最後はノンフィクションであり、小説ではない。しかし、その最後の作品も小説同様の興味が有り、他の三つの小説とならなくても特に違和感はない。ここに収められた四つの作品はいずれもまず *The London Review of Books* に発表され、その後、小さな単行本として一冊ずつ出され、それが今回改めて一冊の本にまとめられたものである。

出版年が一番古い作品がノンフィクションの *The Lady in the Van* である。この作品については、単行本として出たあとに評者は詳しく論じたことがある（北陸大学紀要第27号（2003））。三つの小説に並んでこの作品が収容されていることに多少の感慨を禁じえない。私見によれば、*The Lady in the Van* は小説家ベネットを生み出すきっかけとなった作品であるからだ。これ以後、ベネットは、四つの小説を発表している。戯曲家がノンフィクションを経て小説を書き、そしてその小説が次第に自在さを増していく過程には目をみはるものがある。

*The Lady in the Van* は1989年の *The London Review of Books* が初出である。後に1994年の *Writing Home* におさめられ、さらに1999年に単行本として Profile Books から出されている。今回の *Four Stories* によって4回目の出版となり、この作品の持つ力が伺われる。ベネットはこれを戯曲化しており、1999年11月19日にロンドンの Queen's Theatre で初演となっている。台本は2000年に Faber and Faber から出版されている。

*The Lady in the Van* は前述のようにノンフィクションであり、アラン・ベネットが自宅の前庭に住まわせることになったホームレスの女性との交流の記録である。ベネットが彼女の存在に気づいたのは1969年10月ごろである。ロンドンの北西部の町カムデン・タウンの修道院近くでエンストを起こしたバンのそばに、やせた背の高い老女が立っている。6フィートはある。ゴルフ帽をかぶり、油だらけのレインコートを黄色のスカートの上にはおり、足にはかかとのついた室内用のスリッパを履いている。彼女の名は自称ミス・シェパード（本名はついに明かされることはない）、ポンコツのバンを住いとしてカムデン・タウンをあちこち移動して暮らしていた。しかし1974年春からベネットの敷地で暮らすようになり、1989年4月にバンの中で死ぬまでベネットの前庭に住んでいた。約20年間にわたる彼女とベネットとの交流の記録が *The Lady in the Van* である。ベネットが日記のようにメモしていたものをまとめて本としたもので最後はミス・シェパードが死んだあとの後日談である。

この作品はよくあるような美談の記録ではない。孤独で偏屈な老女がベネットの親切に心を開いて改心し、まっとうな生活にもどっていくというような話でもない。そもそもベネットが彼女を庭に入れることになったのは単なるいきがかりからである。彼女のバンが、あるときからベネットの家の向かい側に止まったきり動かなくなる。いやでもベネットはミス・シェパードの状況を見ざるをえなくなる。路上生活者たる老女に数々の迫害が行われるのを何度も目撃したベネットはとうとういたたまれなくなり、自宅の前庭を提供する。しかし、ミス・シェパードは偏屈の固まりのような女性である。親切をあだで返すことはいくらでもある。ベネットは「絞め殺してやりたい」と思わずもらしたりもする。厄介極まりない老婆だ。かかわらないに越したことはない。だが、ベネットは彼女を放り出すことはできない。となれば最低限のかかわりでやっていくしかない。そのようなかかわりの記録が美談集となろうはずがない。

ミス・シェパードは最後まで偏屈を貫き、自分の過去についてもほとんどあかさずにホームレスのまま死んでいく。そのような老女との交流の記録はミス・シェパードという人間の観察の記録としてきわめてすぐれたものになっているが、ベネットはそのミス・シェパードの異常な人生に一種の普遍性を与えることにも成功している。最後のころにベネットがミス・シェパードと自分の母とを比較して感慨にふける記述がある。そこから見えてくるのはじつはホームレスであるミス・シェパードの人生がまた私たちの人生とも重なるものであり、また、私たちの人生の批評にもなっているということである。ベネットが作品のタイトルを *The Woman in the Van* とせずに *The Lady in the Van* としているのはきわめて意図的である。Lady ということばは女性の尊称であるだけでなく貴族の女性に与えられる称号でもある。このことばは自己を貫き通した女性へのベネットのオマージュなのだ。

ベネットはおそらくは語り手となることのおもしろさと小説の技術——特に編集の技術——とを *The Lady in the Van* で学んだ。*The Lady in the Van* 以前の1982年にBBCの脚本として書かれたものを散文化した *Father! Father! Burning Bright* が、*Four Stories* では3番目の作品として収録されているが、これは以後の作品と比して遜色があるのは否めない。もっとも、この作品についてはもともとの執筆の意図からして特殊な事情があった。

*Father! Father! Burning Bright* は、学校の教師 Midgley が主人公である。父母面談をやっているミジリーのところへ離れて暮らしている父が危篤状態であるとの報が入り、彼は急ぎ病院に行く。父の臨終に立ち会わねばならないとの思いから病院に泊り込んでその時を待つ。しかし、その時はなかなか訪れない。最後に父は死ぬが、ミジリーは臨終には立ち会えない。当直の看護婦とベッドにいたからだった。そのときまでの顛末を描いたのが

*Father! Father! Burning Bright* である。

ベネット自身の説明によれば、関係者に脚本だけではミジリーという人物をよく理解してもらえなかったのが、彼という人間をよりよく説明するために散文に直してみたとのことである。つまり、この作品は最初から小説を意図して書かれたものではなく、脚本の散文化されたものなのである。実際の作品はもちろん小説として十分通用するものである。だからこそ、20年近くたって出版されたのである。だが、小説としての魅力や完成度はこれから取り上げる2作には及ばない。

なお、この *Father! Father! Burning Bright* というタイトルは、ロマン派の詩人 William Blake のもっとも有名な詩 *Tyger* の冒頭のことば、*Tyger! Tyger! Burning Bright* をもじったものである。ブレイクの詩では一匹の猛々しい虎が闇夜の中で光り輝いて創造主に対する詩人の驚異の念を象徴しているが、ベネットの作品では病院の集中治療室の中からミジリーを呪縛する父親を表している。

実質的にベネットにとって初めての小説となる作品は *Four Stories* のなかでは二つ目に置かれている *The Clothes They Stood Up In* である。このタイトルは日本語にしてみれば「着の身着のまま」というほどの意味である。話は、ロンドンのフラットに住む中年の夫婦がモーツアルトのオペラを見て帰宅したら、一切の家具がなくなっていたということから始まる。電話もなくなっている。トイレトペーパーもなくなっているという徹底ぶりである。それで夫婦は「着の身着のまま」の状態となる。ランソム氏は携帯電話は使わないので公衆電話をさがして警察を呼ぼうとする。やっと見つけた電話ボックスのドアを開けてみると電話は引きちぎられ、内部は公衆トイレと化している。ランソム氏はあちらこちらと歩き回ってコインランドリーでやっと使える電話を見つけて警察を呼び、警察は夜中もだいぶすぎたころにやってくる。しかし、手がかりは何もない。

ランソム夫婦は何もないフラットでの生活をしていかなければならなくなる。もちろん、何もない状態では生活できないから少しずつ生活に必要なものを買そろえていく。そして数ヶ月たって、新しい生活に適應できかけたころ、請求書が倉庫会社から届く。車でかけつけてみると、一切の家具がランソム夫婦のフラットにあったのとまったく同じ状態で置かれていた。倉庫の担当者は依頼により行われたのだという。いったい誰が依頼したのか、何のために行われたのか、誰もわからない。しかし、すべては無事にランソム夫婦のフラットにもどり、夫婦はまた元の生活にもどる。

なぞはランソム夫人が誤配された手紙をフラットの最上階に住む若者に届けたことから偶然に解ける。すべてはその若者の恋人が別れるに際して、その若者に仕掛けた「冗談」

だった。ただ、その若者の姓とランソム夫婦の姓とが似ていたので依頼を受けた業者がまちがえてランソム夫婦の部屋の家具を運び出したのだった。夫人は若者の部屋にあった乳母車を見て大きくなり死んだ子供を思い出し、そのことを若者に話す。その子供のことを人に話すのは30年ぶりである。数日後、若者は引っ越していき、まもなくランソム氏が脳卒中で倒れる…

*The Clothes They Stood Up In* はランソム夫人の自己発見の物語である。一切の家具がなくなったことから、夫人は今までとはちがった生活をせざるをえなくなる。今まで行かなかった店に行き、それまで話したことのなかった人たちと話しを交わす。最初はそのことを非常に重荷に思うが、次第にそれを受け入れるようになってくる。むしろ、楽しむようにさえなってくる。人の親切が前よりも身にしみて感じられる。不自由だらけの新しい生活を楽しみながら、夫人は以前の生活——ランソム氏との生活——がいかに貧しいものであったかに気づいていく。モーツアルトがなかったら離婚していたかもしれないと彼女は思う。二人をつないでいたものはそれだけで、それ以外には何もなかったのかもしれない。来客を迎えての晚餐用に一式をそろえた高価な食器類も20年間一度も使うことはなかった。

事件を一種の天啓のように感じながら新たな人生を生きようとしていく夫人の心境を穏やかな筆致で描きながら、ベネットはランソム氏の生き方を対比させる。彼は変わっていくことができないし、変わる気もない。おのれの人生の貧しさに気づくこともできないのだ。この作品は中年夫婦のための教養小説と言ってもいい。

こう書いてくると何か深刻な説教めいた作品と感じられるかもしれないが、そうではない。*The Clothes They Stood Up In* を特徴づけているのは何と言ってもベネット的としか言いようのないユーモアである。家財の一切がなくなったため、ランソム氏が密かに隠れて使っていた、夫人の毛染めの残りの入ったビンまでもがなくなり、以後、ランソム氏のひげには黄色のまだら模様が入るようになったという一節などきわめておかしい。ランソム氏は夫人に毛染めを使わせてくれと言えないのである。これはランソム氏の生き方のみごとな諷刺となっている。ベネットのこのような小物を使った笑いはじつに巧みで、それが随所に出てくる。喜劇作家として成功した所以である。小説の中でもその手腕はぞんぶんに発揮されている。

*Four Stories* に収められた作品で一番新しいのが冒頭に置かれた *The Laying On Of Hands* である。これは小説としてきわめて完成度の高い佳編である。'laying on of hands' とは「手を置くこと」が文字通りの意味であり、また、洗礼を受けたキリスト教徒が成人して、

手を頭に置いてもらって信仰告白をする儀式「堅信礼」の意味もある。この作品では、追悼式の対象である人物が、人の体の上に手を置くと、手が治癒力を持つ熱を発するという特殊な能力を持つマッサージ師であること、また、作中で、これから大学生になろうとする若者が同性愛の世界に踏み込む決心をすることの双方を意味している。

話の舞台はロンドンの教会である。マッサージ師の青年 Clive の追悼式がある。数ヶ月前にクライブは旅先のペルーで死んでおり、葬儀はそこで行われた。この追悼式を仕切るのが教会の司祭 Geoffrey Jolliffe で、この式は彼の昇任試験でもある。式を密かに採点しているのが英国国教会の大執事 Treacher である。ジョリフ司祭は、参会者の顔ぶれを見て驚く。ロンドン社交界の名士がずらりと並んでいる。作家もいるし俳優もいる。ニュースキャスターもいる。教会の周囲には有名人のサイン収集家が多数来ているほどである。一人で来ている参会者もいれば夫婦で来ているものもある。追悼式だから当然明るい雰囲気ではないが、ふつうの追悼式とはちがう重苦しいものが感じられる。式は最初ふうに進むが、一区切りついたところで、ジョリフ司祭は自分がクライブの知り合いであったことから、ふと思いついて、参会者で希望するものには一言述べてほしいということを宣言する。何人かがクライブを偲んで話をするが、そのうち坊主頭の若者 Carl が話し出し、クライブが同性愛者であったことを明らかにする。そして、死因がエイズだったと断言したことから、教会内は異様な雰囲気になる。参列者のかなりの数がクライブと関係を持っていたからだ。不安が的中したのである。夫婦二人でうろたえている者もいる。そのうち、ペルーに行っていたという19歳の若者 Hopkins がクライブの臨終に立合い、死因はエイズではなく、その地方に住む虫に刺されたことが原因だったという。教会内には安堵のため息があちこちから漏れるが、カールは猛然とそれを否定する。気圧されたホプキンズは反論できない。再び、教会内は鎮痛な雰囲気となる。そのとき、一人の医師が立ち上がり、クライブはペルーに発つ直前に検査を受けており陰性反応を示しているのでエイズでの死はありえないという説明をする。参会者からは拍手が起こり、教会内には幸福感があふれる。密かに案じていたジョリフ司祭も胸をなでおろし、追悼式は終わる。追悼式のあと、ホプキンズは一人残り、司祭にクライブの遺品であるノートを見せる。そこにはクライブが関係した人物のイニシャル、体の特徴、嗜好などが日記の形態で書かれていた。ジョリフ司祭のイニシャルもある。ホプキンズはそれを処分したいと言う。司祭は話を聞くうちに、自分でも気がつかないうちに、それまででない大胆な行動を取るようになる…

*The Laying On Of Hands* は同性愛をめぐる作品である。エイズを題材にしてもいる。過去にはエイズ患者の悲劇を描いた深刻な作品が多く存在するが、この作品は喜劇である。

哄笑するための喜劇ではなく、微（苦）笑するための喜劇である。戯曲家ベネットの資質がいかに発揮された小説家ベネットの作品である。読者は主人公のジョリフ司祭の微妙な心の動きを仔細にたどりつつ、参会者の心のうちにも自在に出入りできる。トレチャー大執事のメモをのぞき込んでイギリス国教会の現状の一端を知ることできる。作者があちこちで洩らすことば遊びも、皮肉な観察も楽しむことができる。そして、特筆すべきは作者の熟練の手つきだろう。とても劇作家の余技などではない、小説家としてのゆうゆうたるペン捌きにベネットの年輪が感じられる。

アラン・ベネットは最初に述べたようにイギリスの国民的作家である。しかし、日本ではほとんど知られていない。それは彼が劇作家で喜劇を書いていることを思えば、ある程度理解できる。ギリシャ悲劇は有名だがギリシャ喜劇はそれほど知られていないのと同様である。喜劇が国境を越えるのは容易ではない。実際、ノンフィクションをもとに喜劇化された *The Lady in the Van* はイギリスでは大きな話題となったが、日本では黒柳徹子を主演としてもほとんど注目されなかった（2001年10月12日～11月4日銀座セゾン劇場）。

ベネットが日本で知られていない、もう一つの理由は戯曲の中で彼が描いているものはイギリス人のためのイギリス人の世界であるということだ。特に、中産階級のイギリス人の世界である。それは島国的と言ってもいいかもしれない。イギリス人とはどんな人間なのか——それをベネットはユーモアにからめて描く。諷刺がある。冗談がある。言葉遊びがある。そこから生じる世界は ‘Bennettian World’（ベネット的世界）としか呼びようのないものだ。イギリス人たちはそこに自分たちの似姿を発見して喜ぶ。ベネットのことを評するときには必ず ‘English character’（英国的性格）が引き合いに出され、‘funny’（おかしい）ということばが繰り返される。‘Bennettian World’は ‘English character’をテーマとした ‘funny’な世界であり、イギリス人のための世界である。これが戯曲である場合、日本人にわかりにくいものとなるのは必至である。受容はそれほど簡単なことではない。

しかし、小説となると話はちがう。小説という芸術形式には戯曲とは別の普遍性がある。*Four Stories*の中の三つの小説は日本人の私たちにも十分理解できるものである。そしてもう一つのノンフィクションの作品もそうである。ベネットが戯曲で作り出してきた世界を今私たちは散文で味わうことができる。イギリス人はどんな人間なのか、自分たちをどんな人間と思っているのか。それを私たちはこの本で知ることができる。そして、何よりも味わい豊かな ‘Bennettian World’を堪能できる。まことに慶賀すべきことと言わねばならない。